

Newsletter

2022.12.12

立教大学全学共通
カリキュラム運営センター

FDプログラム「ミックス型授業の実施報告－全学共通科目 総合系科目『立教人から学ぶメディアの世界』から－」

「立教人から学ぶメディアの世界」コーディネーター／
全カリ運営センター部長／社会学部教授 井川 充雄

2022年9月5日（月）に全学共通カリキュラム運営センター主催のFDプログラムとして、「ミックス型授業の実施報告－全学共通科目総合系科目『立教人から学ぶメディアの世界』から－」を開催しました。立教大学では、2022年3月の教育改革推進会議にて、ミックス型授業をパイロット実施することを決定し、以下3点を検証項目として設定しました。

- 1) 授業運営方法（履修者数管理、出欠管理、機材・機器の配置、準備人員、等）
- 2) 授業内容（授業内容の構成、メディアの活用方法、リアクションペーパーの活用方法、等）
- 3) 成績評価方法・教育効果

当日は、主にこの3点に沿って、2022年度春学期にミックス型授業を担当した井川全カリ部長より、ミックス型授業の可能性や課題がどこにあるのかについて、ご報告いただきました。

※本稿は、FDプログラムにおける報告内容を編集したものです。

－授業の運営方法について教えてください。

① 履修者数管理

「立教人から学ぶメディアの世界」は全部で300人の定員設定です。履修登録の際、「対面」クラスと「オンライン」クラスを別々に募集するため、定員は別々に設定しています。本学の池袋キャンパスと新座キャンパスに所属する学生の比率3対1に準じて、池袋キャンパスの教室で開講する「対面」クラスの定員は225名、「オンライン」クラスの定員を75名と設定しました。

抽選登録の倍率は、「対面」クラスが1.5倍、「オンライン」クラスが2.3倍でした。「オンライン」クラスの履修定員が少ないということもあり、倍率が高くなりました。履修申請者の属性を見てみると、「対面」クラスの90%が池袋キャンパスの学生でした。これは想定どおりではあったのですが、実はオンラインクラスの方も6割近くが池袋の学生でした。オンラインクラスでは、新座キャンパスの学部学生が履修する見立てで定員を設定していたのですが、実際にはオンラインクラスの半数以上が池袋キャンパスの学生でした。

このような結果になってしまった要因の一つとして、時間割表があるように思います。時間割表を見ると、池袋キャンパス開講分の時間割表には、対面クラスとオンラインクラスの両方が併記されています。一方、新座キャンパス開講分の時間割表にはオンラインクラスが載っていないのです。本学では、オンライン授業であっても、設置キャンパスという概念があり、本科目については、それが池袋になっていたために、池袋の時間割表にのみ記載されてしまっていたようです。そう考えると、逆に新座の学生はよくこの科目がオンラインで開講されていることに気が付いたとも思ったわけですが、この点は今後の課題かと思っています。

② 出欠管理

学生は履修するにあたり、あらかじめ対面またはオンラインのいずれかの受講形態を選択のうえ履修登録をしています。ただ、ミックス型授業ならではの点として、対面履修者には「半数回以下はオンラインでの出席を認める」こととしました。大学設置基準法では、遠隔授業による修得単位数は60単位を上限とする（60単位上限）と定められていることもあり、対面履修者は、必ず半数回以上は対面で出席するようアナウンスしました。

最初の1、2回はほぼ全員が履修登録通りに出席していますが、次第に対面の出席者数が減ってきて、それに比例するようにオンラインの出席者数が増えていく形になりました。第13回の授業ではついに対面とオンラインの出席者数が逆転しています。この理由は、半数回まではオンラインで出てもいいとしたことによるものだと考えています。おそらく対面履修の学生は、6回まではオンラインで出ていいということとを計算しながら、受講していたのではないかと思います。

対面で履修している人がオンラインで出た割合、オンラインで履修している人が対面で出た割合について調べてみたところ、対面出席者のオンライン出席が0回の人18%、1～3回が38%、4～6回が39%でした。6回まではオンラインで出席してもいいと言ったことを受け、95%の学生はその範囲内にとどめているということがよくわかります。ちなみに、7～9回オンラインで出席した人の中には、成績が不可となった人ももちろんいますが、コロナに罹患し、オンラインで受講を認めた学生も含まれているため、そのような学生は7～9回であっても単位を修得している場合があります。逆にオンライン履修者の対面受講者は少なかったです。0回が74%、1～3回が21%でした。1人だけ12回対面で出たという学生がいました。

③ 機材・機器の配置

今回この授業を担当したことで改めて分かったのですが、立教大学の教室内の機材は大変整備されており、教室に設置されている機材のみでミックス型に対応することができました。

授業で提示するための資料は常設パソコンで表示し、それが教卓上のプレビューモニターに映し出され、そのプレビューモニターの映像が配信用パソコンから配信されるという仕組みになっています。カメラは、教室の天井カメラを使って撮影しました。Webカメラを使わずして、天井カメラだけで講師の顔を十分撮影することができました。スクリーンについては、ゲスト・スピーカーが資料を使いながら説明したい場合と、口頭だけでやりたい場合とありましたので、それに応じてメインスクリーンの使用方法を変えていました。なお、サブスクリーンをおろすと、最前列に座っている学生からメインスクリーンが見えにくくなるという声もあり、メインスクリーンとサブスクリーンを同時には使いませんでした。

機器の操作については、メディアセンターに最初の何回かサポートに来ていただきましたが、すぐに覚えることができました。それからこの授業ではSAの学生を1名、その他に校友会事務局や募金室の職員の方々にも協力いただきました。この点はコラボレーション科目ならではの利点かと思います。

―授業の内容や構成について教えてください。

この科目は、春学期の金曜4時限に、全学共通科目総合系科目のコラボレーション科目として開講しました。コラボレーション科目は、専門分野の異なる複数の教員が協働して運営する科目です。本科目では、私と豊田順子先生（兼任講師）、それからもう1枠は毎回ゲスト・スピーカーをお招きしてお話を伺う形で開講しました。

毎回異なるゲスト・スピーカーが来ることもあり、毎回の授業で出席確認を行いました。対面クラスでは、ハンディターミナルを使って出席確認を行いました。オンラインの方は、Zoomの「レポート」の中の「用途」から出席状況を転記する方法で確認をしました。また、毎回リアクションペーパーを提出してもらいました。通常、リアクションペーパーは授業内で書かせるのですが、対面とオンラインの両方で開講していることから、

オンラインの履修者からはその場ですぐに回収することができません。また対面の履修者にその場でパソコンから提出させることもできません。そのため、金曜日に授業をして、月曜日までにレポートを出させることにしました。1200字のレポートを毎回課しました。毎回の資料配布・レポート提出は、Blackboardで行いました。

ー成績評価方法・教育効果について教えてください。

学生が質問や発言をどのぐらい積極的にしたかという数字を紹介します。これは今後の課題になりそうな点かと思います。

ゲスト・スピーカーには授業の半分ぐらいの時間を使ってお話いただき、その後、豊田先生からいろいろ質問していただき、最後に学生からの質問を受け付けました。ゲスト・スピーカーのお話しする時間によっては、質問時間がなくなってしまったこともあったため、授業回によってバラつきはありますが、面白いことが分かりました。1回目と2回目はほぼ対面もオンラインも質問・発言の比率は同じでした。3回目、4回目はオンラインからの発言の方が多かったです。ところが、オンラインからの質問や発言はだんだんと減ってしまい、9回目と14回目の授業ではオンラインから質問・発言をしてくれた人はいませんでした。私からは、毎回「オンラインの人で質問ありませんか」と聞くようにしていましたが、次第にオンラインの出席者の人は発言をしなくなる傾向があることが分かりました。質問・発言の比率を比較したところ、対面の方がオンラインの倍近くありました。オンラインからの発言というのはなかなかしづらいところがあるのかもしれないことが分かりました。

成績評価方法・基準は、レポート試験60パーセント、平常点40パーセントで設定をしましたが、興味深い結果が出ました。対面とオンラインのクラスを意識せず採点した結果、評価の分布が奇しくもほぼ同じ割合になりました。今回の結果だけを見ると、対面とオンラインにおける教育効果の差は特にないと言えるかもしれません。

ーミックス型授業についての学生の声について教えてください。

本科目では、独自のアンケート調査を行いました。回答者はあまり多くはないのですが、回答者の内訳は対面とオンラインの比率通りでした。その結果をご紹介します。

① 対面履修者の声

対面で履修した理由を聞いたところ、「教員、ゲスト・スピーカーの声をじかに聞きたいと考えたから」が大半を占めました。一方、対面履修者がオンラインで履修した理由として、授業外（体調、就職活動、アルバイト、サークル活動など）を理由にオンラインという選択肢を取ったということも分かりました。

② オンライン履修者の声

オンラインで履修した理由として、「この科目の前後に、オンラインの科目が入っているから」「なるべくオンラインの科目を多く取りたいと思ったから」、「就職活動、アルバイト、サークル活動などの都合から」という回答でした。さらに、オンライン履修者の履修環境についてたずねたところ、7割以上の学生が自宅と回答しました。ちなみに新座キャンパスでは、オンライン受講用の教室を用意しているのですが、そこで授業を聞いたと回答した人は1人しかいませんでした。

③ ミックス型授業という形態について

「キャンパスに関係なく授業を選択できて良い」や「(授業)回によって対面とオンラインを選択できるのでよい」に対して9割以上の学生が「そう思う」と回答。「対面授業と同様の教育効果があると思う」という質問に対しては、8割以上の学生が「そう思う」と「ややそう思う」と回答しています。ここまではミッ

クス型授業のメリットにあたる点と言えるかと思います。

逆に「対面クラスの履修者に比べ、取り残されている感じがする」という設問に対しては、オンライン履修者の半数近くの人を取り残されている感じがするという結果でした。それから「対面クラスの履修者に比べ、発言や質問がしづらい」についても、半数が「そう思う」か「ややそう思う」と答えています。ところが、ちょっと面白いデータがありまして、「対面履修者がオンラインで受講した際の感想」では、取り残されていると感じている履修者は2割程度、発言や質問がしづらいと答えた割合も4割未満でした。先ほどのオンライン履修者の結果と比べると、同じ設問でも感じ方が異なるという結果が表れました。察するに、対面履修者の場合は、教室で履修したことがあるため、教室の雰囲気や授業の進行が頭の中で描きやすいのでしょう。そのため、オンラインで受講をしても、質問がしやすいとか、取り残されているように思わないと感じているのではないのでしょうか。一方で、オンライン履修者の人は教室で受講したことがないので、オンラインの画面に見えているものしか世界として見えていません。そのため、取り残されているとか、発言がしづらいという感想につながったのではないかと感じています。

④ 今後、立教大学全体で、このようなミックス型授業を増やした方がいいと思うか

この設問に対しては、1人を除いて全員が「増やした方がいい」と回答しています。そのように思う理由として以下3点が挙げられます。

A) 「選択可能性」として

体調がすぐれない場合や、前後の授業がオンラインになった場合、就活など、やむを得ない事情が入った場合に対応しやすい。

B) 「キャンパス間履修」として

池袋キャンパスの方が科目数が多い。所属キャンパスを問わず、貴重な講義が受けられる。

C) 対面授業のメリット、デメリットとして

対面授業のメリットとして「対面授業の方が講師の伝えたいことが良く伝わるし、本気で取り組む人が多い」という意見がある一方で、デメリットとして「授業中の私語がうるさい」あるいは「対面で質問するのが苦手な人もいる」という理由がありました。

⑤ その他の意見や感想

1) 技術的側面

オンライン側の人の声が出るよう、Zoomの画面をスクリーンに表示しておいたのですが、そうすると個人宛のチャットもすべて画面に映ってしまうことが分かりました。この点は改善の余地が必要かなと思いました。

また、今回の授業では3本のマイクを使っていたのですが、音量調整はそれぞれのマイクではできません。大きい声に合わせると小さい声の人は聞こえなくなってしまうし、小さい人の声に合わせると大きい人の声が割れてしまうなど、音量の調整が難しかったです。今回、協力いただいた職員からもマイクの使い方について言及がありました。教室で目の前に人がいると、習慣として、マイクがなくても大声を出せば伝わるという感覚になってしまい、マイクなしで喋ってしまうことが起きがちです。しかし、そうすると、オンラインの人は何も聞こえなくなってしまう。この点は気を付けなくてはいけないところですね。

2) 授業運営の観点

オンラインであっても取り残されている感覚はなかったという意見がある一方で、取り残されている感覚があったという双方の意見がありました。オンラインの履修者にとっては、マイクの音声以外は何も拾われないので教室の反応が見えません。そのため教室内で笑いが起きていても、オンライン上では分からなかったことがあったようです。やはり、教室の雰囲気が分からないなかで質問するのは勇気がいるのではないかと思うとともに、同じ空気感で授業を展開することの難しさを感じています。

3) 今後の方向性

「対面とオンラインが常に用意されている状態というのは心の余裕にもなりありがたい」、「対面とあまり差を感じない」など、全体的に好意的な意見が見受けられました。

4) 履修方式について

「オンラインの受講上限を設けるのではなく、無制限で選べるようにしていただきたい」「履修段階でオンライン・対面を固定するよりも、後から自由に選べる形だとなお良い」のような意見がありました。60単上限との兼ね合いで、どのように履修登録させるかは引き続き課題であることを認識しました。

ーミックス型授業の今後の可能性や課題について感じられたことを教えてください。

メリット、デメリットを整理すると以下のとおりになります。

■ メリット

- ・学生にとっての選択可能性
- ・キャンパスを超えた履修・アンバランスの是正
- ・教育効果には差がない（さらなる検証が必要と思われる）

■ デメリット

- ・技術上の問題音声・資料提示
- ・今回、主担当教員は、技術的な面を主に担当
- ・出欠管理の煩雑さ
- ・講義の熱度の差異や一体感の欠如

最後に、今後の検討課題として4つほど挙げたいと思います。

1) 履修登録の方法

本科目では池袋の学生には対面で履修してもらって、新座の学生にはオンラインで履修してもらおうつもりでしたが、実際には多くの池袋の学生もオンラインで履修していました。今後、キャンパス制限を設けるのかどうか検討が必要かと思っています。

2) 技術的改善

立教大学は、教室設備の機器については、かなり整備されているため、基本的なことはできるということが分かりました。その一方で、学生はテレビやyoutubeと同等の水準を要求してきますので、授業をサポートする人員として、TA・SAは必須だと思います。今後はTA・SAのトレーニングが必要になると思います。また、今後、ミックス型授業を増やしていくのであれば、サポートする人員が配置できない場合にどのように運営するかを考えていく必要があると思います。

3) 出欠管理の方法

60単位上限の関係上、今回の授業では、対面履修者には必ず半数回以上は対面で出席するよう指示しましたが、それ自体はちょっと矛盾も感じています。どのように管理していくのかは検討課題だと感じています。

4) オンライン参加者からの質問・発言をどう引き出すか。グループワークの方法。

今回の授業ではグループワークは行いませんでしたが、前述のアンケート結果にもあったとおり、オンライン参加者の質問・発言をどう引き出すのか。そしてグループワークの方法については、今後の検討課題だと思います。

ドイツ語教育研究室主催

2024年度言語B教育新カリキュラムに向けた「第1回新カリFD研修」

ドイツ語教育研究室主任／外国語教育研究センター准教授 坂本 真一

2022年9月14日（水）にドイツ語教育研究室主催のもと「第1回新カリFD研修」を開催しました。言語B（ドイツ語・フランス語・スペイン語・中国語・朝鮮語・ロシア語）では2024年度より新カリキュラムが導入されます。現在、各言語教育研究室でさまざまな準備を行っていますが、ドイツ語教育研究室では3年にわたってFD研修を実施することにしました。本号では、FD研修の狙いと第1回の様子について紹介します。

実施の背景と目的

2024年度以降の言語B教育新カリキュラムでは、ヨーロッパ言語共通参照枠（以下、CEFR）の理念でもある「複言語・複文化主義」に基づく言語教育を展開します。学生が、母語以外の言語や文化を学び習得する過程で、自身と他者の比較や価値観の相対化をしつつ寛容的な姿勢を養い、グローバル化が進む社会におけるさまざまな問題にアプローチし解決策を提案する力を養うことを、言語教育上の目標と据えています。そのためには、学習対象の言語や文化の知識を得るのみではなく、日常生活や社会的な活動で遭遇する可能性のある場面や状況に基づいた「タスク」を達成する能力を身に付ける必要があります。

これらを達成するために、教室では、より言語の運用能力の育成を目指した指導を行っていかなくてはなりません。ドイツ語教育研究室では、指導する側が特に「コミュニケーション・アプローチに基づく指導法」と「当該言語を教授言語として授業運営する能力」を身に付けておく必要があると考えました。すでに実践経験を多く積んだ教員であっても教育上の理論的な知識には個人差があります。従来のような言語の知識（文法や語彙の獲得）にのみ主眼を置く授業運営であれば、この個人差はさほど問題となりません。しかし、学習者の言語運用能力の育成を目指す場合、どうしても教授法・指導法に関する理論の基盤とそれをもとに自身の授業を展開するための応用力を教員側が身に付けておく必要があります。また、ほかの職業と同じように、教員というのは決して完成し得ないもので、自己成長のため、時代のニーズとともに都度必要となる知識やスキルを身に付ける必要があります。以上から、実践的なワークショップを企画するに至りました。



新カリキュラムについて説明する坂本先生

当日のワークショップの様子

第1回のFD研修には、ドイツ語教育・教授法を専門分野とし、教員養成・教員研修などに取り組まれている野村幸宏氏（甲南大学全学共通教育センター准教授、日本独文学会ドイツ語教育部会幹事・ドイツ語教員養成研修講座実行委員）をお招きし、次の2つのテーマに関するワークショップを実施しました。

総合テーマ：授業計画のための準備—言語の運用能力を育成するための授業運営に向けて—
 ワークショップ（１）教授法の変遷：コミュニケーション・アプローチとその後
 ワークショップ（２）教材分析／学習目的に合わせた授業計画の立案

当日のワークショップには、ドイツ語科目を担当している教員だけでなくドイツ語以外の言語教員からも申し込みがあり、合計15名の参加となりました。テーブルを島型にレイアウト（3～4名×5テーブル）し、各課題に対して少人数のグループワーク形式で議論を重ねました。

今回、2つのワークショップを通して、「学習目標」の設定という観点から授業を計画することの大切さが強調されました。伝統的な文法訳読法であれ、コミュニケーション・アプローチ、あるいはその後に出てきたさまざまな教授法やアプローチであれ、授業を通して学習者は「何ができるようになるのか」という目標設定によって、授業運営上の良さやメリットが変わってくるからです。2024年度以降のカリキュラムは、決して文法などの言語形式を軽視しようとするものではありません。むしろ言語形式に関する知識は、言語を使って何かしらのタスクを達成できるように到達目標を設定していくための基盤となります。学習目標を先に設定し、その達成のために学習項目と課題内容を考えていく「逆向き設計」が重要になるのです。今回のワークショップでは、そのような授業計画の一方法について学ぶことができました。



講師の野村先生とワークショップに参加するドイツ語教員ら

今後期待される効果

教師教育においては養成と研修を区別して捉える必要があります。前者は基礎を身に付け、後者は応用や発展につながるための場です。一度教育の現場に携わるようになると忙しさのあまりになかなか研修を受ける機会に身を投じようとしなくなってしまいがちです。しかし、教育に関する学問分野が発展するにつれて、教育の目標や方法に至るまで少しずつ変化が起こります。それらに常にアンテナを張り続け、教員自身が発展していくことはとても大切です。その一方で、自己成長を個々の教員に任せきりにするのではなく、研修の機会を教育機関が定期的に提供していくことは義務ともいえます。

今回のワークショップは、参加者自身の経験や体験に基づいた意見交換を超え、深い議論をするきっかけになりました。教育経験の背景は個々で異なり、ちょっとしたことであっても異なった視点や考えをそれぞれが持つため議論が深まります。コロナ禍以降オンライン授業が続き、2022年度は対面授業を実施できるようになったものの、教員同士の交流はかなり減ってしまいました。カリキュラム改編を目前に控えた今だからこそ、お互いがお互いの考えをより深く知り、新カリキュラムに向けて全員が同じ方向を向いて動いていくために、集中的に研修の場を設定することに大きな意義があると感じています。今後も続く新カリFDは、教員の自己発展のみではなく、互いの交流を深めつつ、今後一丸となって新カリに向かっていくための場にしていきたいと思えます。

TOPICS

聖路加国際大学合同開講科目を新規開講

8月1日～4日、2022年度からの新規科目として、聖路加国際大学との合同開講科目「いのちを健康で彩る智慧（Health Humanitiesへの招待）」を開講しました。最初の2日間は池袋キャンパスで、最後の2日間は聖路加国際大学で、本学の学生と聖路加国際大学の学生が共に学びました。哲学や心理学、福祉、メディアなどを専門とする有識者や、医療の最前線に立つ専門家からの講義と履修者同士の討論を通して、リベラルアーツの智慧と実践が、すべての人の健康にどのように貢献できるのか深く考える場となりました。



朝鮮語の新しい教科書『プリティ・コリアン』が完成

佐々木正徳朝鮮語教育研究室主任（外国語教育研究センター教授）はじめ同研究室の先生方が制作された教科書が完成しました。2023年度の全学共通科目言語必修科目「朝鮮語」のクラスで使用される予定です。文法事項について教科書内で細かく説明することで、学習者の予習・復習の便宜をはかっています。そのほかにも、前半から日常会話表現を練習に組み込むことで現地ですぐに実践できる力が身に付く構成となっています。朝鮮語を使いこなせるようになりたい学生たちのニーズに応えた一冊です。

著者：石坂浩一・佐々木正徳・
金良淑・郭珍京・李和貞・
岡村佳奈

出版社：朝日出版社
発行：2023年1月30日
価格：2640円（税込）



全学共通科目の履修をきっかけに 学生が学園祭で企画出展

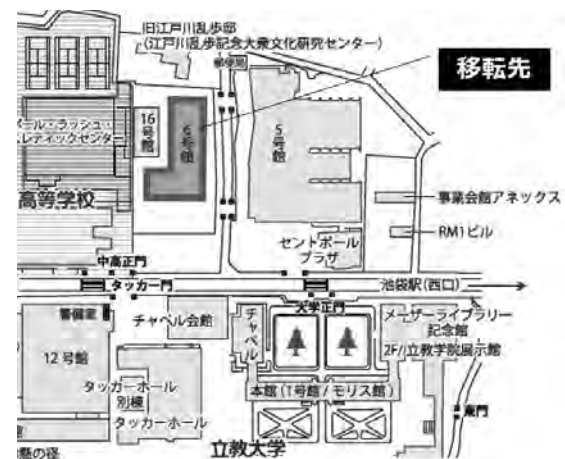
2022年度春学期に全学共通科目「SDGs×AI×経済×法」を履修した宝達 凜さん（現代心理学部 3年次）が、学園祭St.Paul's Festivalにて「海と、あなたと、それから、、、」という展示を行いました。

授業の中で、ゲスト・スピーカーとして登壇した対馬市職員から聞いた対馬の海ゴミ問題について関心をもった宝達さんは、仲間を集めて企画を練り、実際に対馬に流れ着いた海ゴミの展示のほか、プロジェクトマッピングを使った映像や、キャンドル作りなどを企画、実施しました。



【全カリ事務室】 オフィス移転・名称変更のお知らせ

全学共通カリキュラム事務室は、9月16日（金）よりオフィスが6号館1階（池袋キャンパス）へ移転しました。また、組織改編に伴い、「全学共通教育事務室」に名称が変更となりました。各担当のメールアドレスや電話番号につきましては、変更はございません。今後ともよろしくお願いいたします



全カリニュースレター No.54
発行 2022.12.12
発行人 井川 充雄
編集人 後藤 雅知、シュロスブリー 美樹
発行所 立教大学 全学共通カリキュラム運営センター